

# その浮かび来し「思想」

—— 北陸新幹線開業をめぐって ——

篠 崎 尚 夫

## 目 次

### はじめに

1. 「企業者」としての「都市」——シュンペーターとジェイコブス——
  - (1) シュンペーター的「企業者」
  - (2) ジェイコブズの「都市」
2. 金沢の発展、トインビー的イノベーション——「多様性が可能性を生む」——
  - (1) 観光都市批判
  - (2) 創造的「ミメシス」
  - (3) 観光都市 「発育停止社会」
  - (4) 「エラン・ヴィタル」
3. 金沢の「エラン・ヴィタル」
  - (1) 百姓の持ちたる国
  - (2) 「内灘」想
  - (3) 「内灘」想

### おわりに

## はじめに

筆者は、偶々1999年10月に（その1年半後に金沢で生活するようになるのだが）、「北陸新幹線に関わるテレビドキュメンタリー」（富山テレビ制作『それは幻想の如く 新幹線とこの国のかたち』）を観た。

それは、非常に印象に残るものであった。

21世紀を迎えようとしている今、四半世紀も前に構想が生まれた北回り新幹線（北陸新幹線）を巡り、国と地方、政治と官僚、そしてJR各社は未だ結論を出していない。／かつて田中角栄首相が日本列島改造論を掲げた頃、国家プロジェクトと唄われた新幹線も、時代を追うごとにオイルショックや財政危機など、その時々事情に翻弄され、建設の促進と凍結が繰り返されてきた。そしてその一方で、新幹線の建設が地方発展の切り札と信じ、長年、中央に陳情攻勢をかけ、願いを続けてきた地方……。それを尻目に大都市では、

次々にビッグプロジェクトが実現している。新幹線を巡る問題は、実は明治以来脈々と続く、この国と地方の歪な関係を象徴していると言ってもいい<sup>1)</sup>。

『それは幻想の如く 新幹線とこの国のかたち』が放送された前年、1998年3月31日には、『二十一世紀の国土のグランドデザイン 地域の自立の促進と美しい国土の創造』が閣議決定された（橋本龍太郎内閣、以下『グランドデザイン』と略す）。この『グランドデザイン』の時代背景は、第一章の「第一節 国土をめぐる諸状況の大転換」、以下「1 国民意識の大転換」、「2 地球時代」、「3 人口減少・高齢化時代」、「4 高度情報化時代」の各項目によく表れている。

『グランドデザイン』の特徴は、これまでの『全国総合開発計画』（1962年10月5日閣議決定——池田勇人内閣）、『新全国総合開発計画』（1969年5月30日閣議決定——佐藤栄作内閣、1972年10月31日一部改訂閣議決定——田中角栄内閣）、『第三次全国総合開発計画』（1977年11月4日閣議決定——福田赳夫内閣）、『第四次全国総合開発計画』（1987年6月30日閣議決定——中曽根康弘内閣）とは趣を異にした、超長期の構想、つまり「二十一世紀を展望するグランドデザイン」というところにあった<sup>2)</sup>。

が、筆者が金沢で生活するようになって（2001年4月から）、その後10年経つまでは（「2011.3.11」までは）、筆者の周りで、「北回り新幹線（北陸新幹線）」が2015年3月に開業すると、本気で考えていた人はいなかったように思う。

「それは幻想の如く～新幹線とこの国のかたち～」(制作富山テレビ)は、新幹線問題の渦中にいた人物の証言をもとに新幹線を巡るプロジェクトから見え隠れする“この国のかたち”を描くとともに、新たな世紀に向けた国と地方の関係づくりを模索する。／昭和40年秋、その構想は、ある一人の男から突如、時の首相、佐藤栄作に提案された。／「太平洋側に比べ、日本海側の遅れを一挙に取り返すためにも、東京から北陸を通して、大阪につながる北陸新幹線の建設をお願いしたい！」／金沢市で開かれた一日内閣の会場で、地方

1) フジテレビ HP, 『それは幻想の如く 新幹線とこの国のかたち』(制作 富山テレビ)  
[http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/fnsaward/backnumber/back/99\\_342.html](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/fnsaward/backnumber/back/99_342.html) (2015年12月2日確認)

『それは幻想の如く 新幹線とこの国のかたち』は、1999年10月21日の午前3時20分から4時14分にかけて、「第8回 FNS ドキュメンタリー大賞」ノミネート作品として、フジテレビで放送された。

2) 次のものを参照。国土庁計画・調整局監修『二十一世紀の国土のグランドデザイン 地域の自立の促進と美しい国土の創造 新しい全国総合開発計画の解説』時事通信社、1999年。経済企画庁編『新全国総合開発計画』大蔵省印刷局発行、1969年。経済企画庁編『新全国総合開発計画（増補）』大蔵省印刷局発行、1973年。国土庁『第三次全国総合開発計画』大蔵省印刷局製造、1977年。国土庁計画・調整局編『第四次全国総合開発計画』大蔵省印刷局、1987年。

の民間人から出された突然の提案だった。訴えたのは富山県の砺波（となみ）商工会議所会頭の岩川毅である。／岩川は、詳細なデータをもとに、太平洋側の都市に比べて北陸地方の各都市は開発が遅れている実態を政府に説いたのだ。突然の大胆な提案に佐藤首相は一瞬戸惑いを見せたが、岩川の熱意とそのプロジェクトの有益性にじっと耳を傾け続けた。そして、この時の岩川の提案は、その後全国に新幹線を張り巡らそうという構想が沸き起る大きなきっかけとなった。中でも北陸新幹線は、東京と大阪を結ぶ東海道新幹線の代替機能として、大蔵官僚の目にとまり、にわかに建設の意義が取り沙汰されていく。／当時の大蔵省主計官、丸山英人は、北回り新幹線の建設の意義を強く主張した。丸山は、危機管理の観点から「バイパス機能としての北回り新幹線」は、採算から見ても、建設に値すると考えていた。時は昭和40年代の初め、大蔵省に「北回り新幹線建設」のビッグプロジェクトを推進する空気が流れ始めていた<sup>3)</sup>。

1965（昭和40）年、つまり東京オリンピック開催（東海道新幹線開業）の翌年に、早くも「地方の民間人から出された突然の提案」で北回り新幹線（北陸新幹線）が浮かび上がったのである。そして、それは「その後全国に新幹線を張り巡らそうという構想」につながっていく。いわば、「日本列島改造論」の端緒ともいえた。

さらに、「北陸新幹線は、東京と大阪を結ぶ東海道新幹線の代替機能」、「危機管理の観点から「バイパス機能としての北回り新幹線」は、採算から見ても、建設に値する」というのは、「2011.3.11」以降に筆者が感じてきた「変化」と重なる。これは、大変興味深いところである。

だが、過疎からの脱却に悩む多くの地方都市がそれを黙って見ているはずはなかった。やがて、大蔵省に様々な政治的圧力がかけられ始めた。北回り新幹線構想のあとを追いかけるように東北・上越新幹線が構想として浮上していった。／昭和46年2月、東京の赤坂東急ホテル「金の間」。この日、北回り新幹線にとって運命の会議、鉄道建設審議会が開かれた。出席者は声高に、威圧的に発言する時の自民党幹事長、田中角栄（新潟県選出）。そして、声は低い、粘り腰で発言する総務会長、鈴木善幸（岩手県選出）ら……。／同じ場に丸山の後輩で、当時の運輸担当主計官、金子太郎がいた。金子は、北回り新幹線のあとを追いかけるように計画が沸き上がってきた東北、上越新幹線に疑問を持ち始めていた。だが、主計官、丸山の座席は、何故か隅に追いやられていた。そして、会議は1時間余りで終わった。すべてはすでに決まっていたのだ。／“行き止まりルートは無駄とされていた上越新幹線”そして“採算がとれない仙台 - 盛岡ルート”この二つのルートに建設の槓

3) 前掲フジテレビ HP、傍点——引用者。

音が響くことになったのだ<sup>4)</sup>。

1971 (昭和46) 年当時、国の「危機管理」意識、そして公共企業体 (国鉄) の「採算」性というものは、結局置き去りにされてしまったということであろう。その後、国鉄は分割民営化への道を辿ることになる……<sup>5)</sup>。

いずれにしろ、「北陸新幹線」はなかなか動かなかったのである。

この日以降、大蔵省内の空気は“財源上の理由から新幹線NO”に変わっていくことになる。/だが、その一方で、新幹線の建設に夢を馳せる多くの地方……。その夢がすぐにも実現するかのごとく演説する政治家たち……。そしてそれに呼応する様に、次々と夢をちりばめる国の全国総合開発計画…。/だが、新幹線は、なかなか動かない<sup>6)</sup>。

「北陸新幹線開業」をめぐる、筆者は「想」い、そして「思」った。それは、上にみた「北陸新幹線に関わるテレビドキュメンタリー」(『それは幻想の如く 新幹線とこの国のかたち』)に始まり、シュンペーター的「企業者」やジェイコブスの「都市」、そしてトインビーが指摘した「エラン・ヴィタル」……等の再考へと導かれることになった。この作業を通じ、到達した、「金沢の地(血)」から「浮かび来し『思想』」について、筆者はこれから順を追って論じていくこととする<sup>7)</sup>。

## 1. 「企業者」としての「都市」 シュンペーターとジェイコブス

### (1) シュンペーター的「企業者」

「企業者」概念について、J・A・シュンペーターは以下のように定義している。

吾々が企業 (Unternehmung) と称するものは新結合の遂行並びにまた夫れの経営体への具体化物その他であつて、企業者 (Unternehmer) と称するものは新結合の遂行を自

4) 前掲フジテレビ HP, 傍点——引用者。

5) 「国鉄の分割民営化」の背景等について、篠崎尚夫「『鉄道員(ぼっばや)』の思想」(同編著『鉄道と地域の社会経済史』日本経済評論社、2013年所収)を是非参照されたい。

6) 前掲フジテレビ HP, 傍点——引用者。

7) 筆者は、明治大学大学院商学研究科第9回学術セミナー (2015年6月20日、明治大学グローバルホール)で行った講演(「『北陸新幹線開通前倒し』と『金沢、その後背地』に関わる『思想』」)草稿をもとに、本論を書いた。明治大学商学部教授藤井秀登氏、JTB総合研究所主任研究員倉谷裕氏には、大変お世話になった。またとない、良い勉強をさせて頂いた。感謝する。

らの職能とし且つ其の遂行に当つて能動的要素となるが如き経済主体である<sup>8)</sup>。

シュンペーターの用いる「企業者」概念は、通常のものより一面広い。その理由として、彼は、2つの点を挙げている。

まづ第一に吾々が企業者と称するものは単に普通に言ひ慣れてゐる流通経済の『独立的』経済主体を指すのみではなく、この概念の内容たる職能を果してゐる総ての人を指すのであつて、彼等が現在屢々見られるやうに株式会社——また個人商会——に於ける『非独立的』使用人、例へば支配人、重役等々であつても差支へがないし、また彼等の事実上の力や法律上の地位が企業者職能と概念的には無縁な基礎の上に存するのを妨げないし、——一般的ではないにしても株式所有は屢々斯かる基礎となり、特に既存の会社が資本の有利なる調達の為か或ひは相続財産分配の為に株式会社に變更されて、然も以前からの管理者が引き続いて其の指導を継承する様な場合には特にさうである——更にまた単に新規設立を為すためにのみ個々の経営体に関与してそれとの間に持続的な関係を有せざるが如きもの例へば『<sup>フィナンチエル</sup>融資家』、『<sup>グルコンダー</sup>発起人』、金融法律顧問又は技術家であつても差支へがない——但し此の際特に法律上、技術上又は金融上の労務は原則的には〔即ち茲で問題たる発展現象にとつては〕偶然的なものであつて、吾々が後に一層正確にみるやうに事物の本質を形作るものではないのである。第二に吾々は企業者が特殊なる社会的現象として存在するが如き特定の歴史時代に於ける企業者のみを問題とするのではなくして、寧ろ此の概念並びに名称をば其の職能に結び付け、従つて如何なる形態の社会であるかを問はず事実上この職能を果してゐるが如き総ての個人に之を結びつける、但し彼等が社会主義協同体の機関であると封建賦役農場の領主であると或ひは又原始的種族の首長であるとは之を問はないのである<sup>9)</sup>。

ただ、他面で、この「企業者」概念は通常のものより狭くもなるという。

通常云はれてゐるやうに自己の計算で行動をする独立的な経済主体の総てが吾々の企業者概念の中に含まれるとは言ひ得ない。一経営体の所有——又は一般に何等かの『<sup>フエルメーゲン</sup>財産』——は吾々にとつては何等本質的な標識ではない。また此の点を度外視しても、斯かる意味での独立性はそれ自ら吾々の概念の内容たる職能の履行を含むものではない。嘗に農民、

8) J・A・シュンペーター / 中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』岩波書店、1937年、183頁、傍点——翻訳者。

9) 同前、184～185頁、傍点——引用者。

手工業者、自由職業の従属者——之等のものも場合によつては〔通例の企業者概念に〕含まれる——のみではなく、『工場主』または『産業家』または『商人』——之等は常に含まれてゐる——と雖も必ずしも『企業者』たるを要しないのである<sup>10)</sup>。

勿論吾々にとつては『用語概念の解明』の如きは全く茲に意図する所から離れたものであつて、夫れ故に吾々はまた例へば〔独逸語の〕『企業者』(Unternehmer)が英語では“Contractor”『請負師』と訳さるべきであるとか、或ひは『企業者』に或種の解釈を附するがために多くの『産業家』をして自己が此の概念に包摂されることに反対せしめるに至るかも知れないとかと云ふやうな此の言葉の種々の意味付けには敢て拘泥しない<sup>11)</sup>。

そして、シュンペーターは、「何れにしても私は次の如く主張したい、即ち上述した定義は不完全な分析によつては明らかにされ難い事物の本質に迫る権利を持つと云ふこと、即ち吾々の定義は従来<sup>ママ</sup>の学説に於ても亦考へられてゐた現象の本質を単に精確に言ひ現はしたものに過ぎぬと云ふこと之れである」と言い、さらに「吾々の表現法と普通の夫れとの間には『企業者』と『資本家』とを区別すると云ふ基本的な点に於て一致が成り立つ、——この場合に資本家が貨幣の所有者であるか貨幣請求権の所有者であるか、又他の何等かの財の所有者であるか否かは問ふところではない」、「普通の株主そのものが『企業者』なりや否やの問題も亦これを以て解決されることとなるべく、また之れと企業者を危険負担者となす解釈とは一致しない」のであり、「危険を負担する者は常にたゞ資本家のみである、企業家は唯<sup>ママ</sup>々々資本家として之れを負ふことがあると云ふにすぎぬ」と言うのである<sup>12)</sup>。

以上から浮かび上がって来るシュンペーターの「企業者」とは、「新結合を遂行する」という機能(職能)そのものといえる。一定の、ないし具体的な「地位」、「階級」、「階層」あるいは「職業」等とは、直接結びつくものではないことがわかる<sup>13)</sup>。

そして、「此の概念並びに名称をば其の職能に結び付け、従つて如何なる形態の社会であるかを問はず事実上この職能を果してゐるが如き総ての個人に之を結びつける、但し彼等が社会

10) 同前, 185頁, 傍点——翻訳者。

11) 同前, 185頁。

12) 同前, 185・186・188頁, 傍点——翻訳者。

13) ゆえに「企業者を危険負担者となす解釈とは一致しない」「危険を負担する者は常にたゞ資本家のみである」ということになる。つまり、「企業者」としての機能は「新結合を遂行する」ことにあるのであって、その際、危険を負担するかしないかは問題ではない。危険を負担するのは資本家の機能である。ある資本家が「企業者」機能を発揮する場合において、危険を負担するのは資本家としてであつて、「企業者」として危険を負担するのではない、ということになる。また、資本家と「企業者」の関係については、『経済発展理論』の内容構成を考えてみると非常にわかりやすい。シュンペーターは、「企業者」機能のみならず、それを可能にする(支える)「信用創造」機能についても論じてい



主義協同体の機関であると封建賦役農場の領主であると或ひは又原始的種族の首長であるとは之を問はないのである」というように、「企業者」が「機関」でもかまわないわけである。シュンペーターが、以後、『景気循環論』、そして『資本主義・社会主義・民主主義』と辿っていったのも頷ける。

とすれば、本論を進めていく上で、「新結合を遂行する」機能を発揮するものが「企業者」であり、「機関」も「企業者」足り得る、という理解は大変重要になってくる。

## (2) ジェイコブズの「都市」

前節で採り上げた、シュンペーターの「企業者」概念について思いを巡らしているうちに、筆者はジェイン・ジェイコブズの言葉を思い起した。

初めに都市ありき——そして農村が発展する<sup>14)</sup>

何世紀もの間、少なくとも都市について考えてきた人びとは、おそらく人口集中とその人びとが支えうる特質との間に何か関係があるのではないかと注意してきた。一例として、サミュエル・ジョンソンは一七八五年の昔、この関連性を明らかにしている。彼は助手のボズウェルにこう言った。「ばらばらに点在している人びとは、どうにかこうにかやってゆくものだが、実は、きわめて多くのいろいろなものをもたないとやっていけない。便利を生みだすのは集中されている状態である。」／注意して観察を続けてきた人たちは、新しい時代と場所においてこの関連性を永久に再発見し続けるだろう<sup>15)</sup>。

われわれが普通農村の仕事と考えているものの起りは、農村ではなくて都市だったということである。多くの分野——経済学、歴史学、人類学——で流布している理論は、農村経済を基盤にして都市が成立っている、として疑わない。もし私の観察と推論が正しければ、その逆が真実である。農作業を含む農村経済は直接、都市の経済と都市の仕事をもとに成

---

る。単なる資本家（「預金者」と考えるとわかりやすい）は、「銀行」を通じて、いわば（与信・金融的支援という名のもとに、単に）「企業者」に乗っかっているだけであるから、（具体的活動をしない代償として）単なる資本家（預金者）がリスクを背負うのは当然と考えられる。このことは、J・M・ケインズの「活動階級」（労働者、経営者）・「不活動階級」（金利生活者）観と併せて考えてみると、非常に興味深いものがある。

14) ジェイン・ジェイコブズ／中江利忠・加賀谷洋一訳『都市の原理』鹿島出版会、2011年、1頁。「初めに都市ありき——そして農村が発展する」という上手い「言い回し」は、『都市の原理』第1章の「見出し」となっている。

15) ジェーン・ジェコブス／黒川紀章訳『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会、1979年、226頁、傍点——引用者。

立っているのである<sup>16)</sup>。

筆者は、「以上から浮かび上がって来るシュンペーターの『企業者』とは、『新結合を遂行する』という機能（職能）そのものといえる。一定の、ないし具体的な『地位』、『階級』、『階層』あるいは『職業』等とは、直接結びつくものではないことがわかる」、「本論を進めていく上で、『新結合を遂行する』機能を発揮するものが『企業者』であり、『機関』も『企業者』足り得る、という理解は大変重要になってくる」、と前述していた。これに、ジェイコブスの「初めに都市ありきそして農村が発展する」等が組合わさったとき、「都市は『企業者』なのだ」と、筆者には思えるようになった。さらに、「都市が、新結合（便利・流行）を生み出し、それを続けられなくなったとき、都市（『企業者』）でなくなる」とも考えるようになったのである<sup>17)</sup>。

## 2. 金沢の発展、トインビー的イノベーション 「多様性が可能性を生む」

### (1) 観光都市批判

前金沢市長の山出保が非常に興味深いことを言っている。

「多様性が可能性を生む」とは、イギリスの歴史家トインビーの言葉です。／まちは、さまざまな資源を抱えています。その資源をうまく活かすことで可能性が生まれ、可能性がまちの持続的発展をもたらします。／まちの資源は、ある日突然、出現したのではありません。時間の経過とともにつくられ、育ち、成長してきたのです。歴史と多様な資源が一体となって、まちの魅力と個性を形づくってきたのです<sup>18)</sup>。

金沢市では、全事業所の99・7%が中小の事業所です。規模は小さくても、各事業所の業種は多様で、多岐にわたることが特徴になっています。／一つの企業とその下請企業を中心に回る「企業城下町」では、企業の浮き沈みが、そのまま都市の経営を左右しかねません。商業や工業に特化した都市もありますが、偏った産業構成も危うさがつきまといます。／トインビーは「多様性が可能性を生む」と言いました。私は、この「可能性」に「持続性」を加えたい。多様な要素を持つまちこそ、長く続くのです。／産業であれ、文化であれ、多様なものが競合し、協調し、相関する構造の中から活気生まれるのです。（中略）

16) 前掲ジェイン・ジェイコブズ『都市の原理』、2頁、傍点——引用者。

17) 筆者は、かつて、「協同組合、企業者、そして地域」について、「東畑精一の経済思想」を通して考え続けた「経験」がある。その「経験」とも当然繋がって来る。篠崎『東畑精一の経済思想 協同組合、企業者、そして地域』（日本経済評論社、2008年）を参照されたし。

18) 山出保『金沢の気骨 文化でまちづくり』（北國新聞社、2013年、50頁、傍点——引用者。



イノベーション（技術革新）のために学術と文化が必要なのです<sup>19)</sup>。

私は、金沢が「観光都市」と呼ばれることをあまり好みません。（中略）学術を知りたくて、歴史や文化に触れたくて多くの人々が訪ねて来る。まちがにぎわっている。その光景を見（観——引用者）て、金沢を観光都市みたいと言うのならいい、観光そのものが金沢に来る目標であってほしくない。観光は、まちの魅力の結果であってほしいというのが私の持論です<sup>20)</sup>。

A・J・トインビーの「多様性」は、自然や他民族文化等からの「挑戦」に「遭遇」し、どのように「応戦」、どう「対応」するかに関わる。それは、「受容」、積極的な意味での「受容」の仕方であり、「消化吸收」である。「移行」は前向きに真似ること（「積極的模倣」という対応）の結果である。「多様性」とは、様々な「挑戦」に「遭遇」した上で、結果的に身に付く「寛容性」ともいえる。そして、こうした結果の「多様性」＝「寛容性」が成長・発展を都市にもたらすことになる。「偶然」に対し「自由」である人間、その中で形は様々だが、積極的に「対応しようとする者」の集積といえる「都市」は必然的に「新しい組合せ（新結合）」を遂行し続けることになる<sup>21)</sup>。

## (2) 創造的「ミメシス」

トインビーの大著『歴史の研究』を覗いてみる。

i 創造的「ミメシス」 「慣習の殻」はうち破られ、社会は変化と成長の道にそって、ダイナミックに動いてゆく 「創造的破壊」

文明と、われわれの知っている形での未開社会 [やがて、このただし書きの重要なことが判明する] とのあいだの一つの本質的な差異は、ミメシスは（模倣を意味するギリシア語）の向かう方向である。ミメシスは、あらゆる社会生活に見られる、社会という類全体の特徴である。その作用は、未開社会と文明社会の別を問わず、映画ファンのスターのスタイル模倣をはじめとして、あらゆる社会活動において看取することができる。しかしながら、社会の二つの種において、ミメシスは異なった方向に作用する。/われわれの知っている形での未開社会では、ミメシスは年長者と、目には見えないけれども、生きている年長者

19) 同前、67～68頁、傍点——引用者。

20) 同前、55頁、傍点——引用者。

21) 「受容」＝「受け容れる」には、受け容れるだけの「準備」、「訓練」等が充分になされ「下地」、「基礎」、「容量」すなわち受け容れられるだけの能力がなければならない。「受容」には、常に積極的な意味合いが含まれているといえる。

の威厳を強めている死せる先祖たちに向けられる。このようにミメシスが後ろ向きに過去に向けられている社会では、習慣が支配し、社会は静的状態にとどまる。これに反し、文明の過程にある社会では、ミメシスは、開拓者であるからおのずと追隨者が集まってくる、創造的人物に向けられる。そのような社会では、「慣習の殻」はうち破られ、社会は変化と成長の道にそって、ダイナミックに動いてゆく<sup>22)</sup>。

ii 「創造的破壊」 創造的「ミメシス」 = 「陰（静）」から「陽（動）」への「転換（移行）」 = 敢えて「断崖をよじ登る」

われわれは、未開社会から文明への転換から出発し、この転換は要するに静的な状態から動的な活動への移行であることを発見した。（中略）すべての文明の発生は、親縁関係のないものも、あるものもひっくりめて、スマッツ將軍の言った、「人類はふたたび前進を開始した」ということばで言い表わすことができよう。／この、運動 休止 運動というふうには、静と動とが交互に現われるリズムは、さまざまな時代の多くの観察者から、宇宙の本質の中に含まれている、ある根本的なものとみなされてきた。含蓄に富む比喩的表現のたぐみなシナ社会の賢人たちは、この交替を、陰と陽〔陰は静にあたり、陽は動にあたる〕という語で表現した。（中略）では、人間にふたたび活動を開始させた、積極的要因はなにか。過去六千年のあいだに、人間の一部を、〔岩棚の上に横たわる〕未開社会の陰の状態からやり起こし、〔断崖をよじ登る〕文明の陽の状態に移行させた積極的要因は、移行を行なった人間のうちにある、ある特別の資質か、移行が行なわれたその環境の中に認めらる、ある特別の特徴か、この二つの要素の相互作用か、以上三つのうちの一つに求めるべきであることは、自明のことがらであるように思われる<sup>23)</sup>。

iii 敢えて「断崖をよじ登る」には、「二つの超人間的人格の遭遇」が必要で、その結果「文明（都市）の発生」が可能となる

文明の発生が生物学的要因や地理的環境が単独に作用した結果でないとすれば、それは明らかに、この両者のあいだのなんらかの種類の相互作用の結果であるに相違ない。言いかえれば、われわれの求める要因は、単一なものではなくて複合的なもの、つまり、なにか実在物ではなくて関係である。この関係は、二つの非人間的な力の相互作用と考えてもよ

22) 蠟山正道責任編集『世界の名著61 トインビー』中央公論社、1967年、128頁、傍点——翻訳者、傍点——引用者。A・J・トインビー／蠟山正道、阿部行蔵、長谷川松治訳『歴史の研究』（社会思想史研究会出版部、1956年）も参照した。

23) 同前、130～131頁、傍点——引用者。

いいし、あるいは、二つの超人間的な人格の遭遇と考えてもよい。われわれは、この二つの構想のうち、第二のものをとりあげることにしよう。たぶんそれが、われわれを問題解決の方向に導いてくれるであろう。／二つの超人間的な人格の遭遇は、人間の想像力の構想したもっとも偉大な劇のうちのいくつかの筋になっている。や・ハ・ウ・エ（エホバ）と蛇との遭遇が、『創世記』の人間堕落の物語の筋であり、シリア社会の魂がしだいに啓発されてゆくにつれて変貌した、同じ対立者の第二の遭遇が、キリストによる罪のあがないの物語を述べる『新約聖書』の筋であり、主〔神〕とサタンの遭遇が『ヨブ記』の筋であり、主とメフィストフェレスの遭遇がゲーテの『ファウスト』の筋であり、神々と悪魔たちの遭遇がスカンディナヴィアの『ヴォルスパ』の筋であり、アルテミスとアフロディアの遭遇がニウリピデスの『ヒッポリュトス』の筋である<sup>24)</sup>。

iv 「文明（都市）の発生」は「神話的イメージで説明するのがいちばんよい」 アダムとエバ

どの場合でも、物語は完全な陰の状態から始まる。ファウストは知識において完全であり、ヨブは善行と幸運において完全であり、アダムとエバは罪のなさと安楽において完全であり、グレートヒェン、ダナエその他の処女たちは純潔と美において完全である。陰がこのように完全なときには、それはいつでも陽に移行しうる状態にある。しかし、その移行をひき起こすものはなにか。定義上それぞれの性質にしたがって完全な状態の変化は、外部からくる衝動もしくは動機があって、はじめて開始される。（中略）科学のことはで言えば、外部から侵入する要因の機能は、侵入する対象に、もっとも強力で創造的な変化を呼び起こすようにもっともよく計算された種類の刺激を与えることであると言ってよい。神話と神学のことはで言えば、完全な陰の状態を新たな陽の活動へ移行させる衝動もしくは動機は、悪魔の神の世界への侵入によって生じる。このできごとは、このような神話的イメージで説明するのがいちばんよい。そうすれば、説明を論理的表現に置きかえたさいに生じる矛盾にわずらわされずにすむからである<sup>25)</sup>。

v 「アダムとエバ」 失楽園 = 「新たな分化を試みることを要求する挑戦を受諾」 試練  
「社会創造」 = 「新生文明（都市）」の誕生

劇の主演である人間の役柄はどうかと言えば、その役を演じるイエスにしろ、あるいはヨ

24) 同前、138～139頁、傍点——引用者。

25) 同前、140～141頁、傍点——引用者。

ブ、あるいはファウスト、あるいはアダムとエバにしる、かならずみな苦しみ悩むのが基調になっている。エデンの園におけるアダムとエバの姿は、未開人が地球上の他の動植物にたいする支配を確立したのちに、食物採取経済の段階において到達した陰の状態の回想である。善悪の知識の木の実を食う誘惑にたいする反応としての墮落は、いったん達成されたこの完全さを捨てて、そこから新たな完全さが生じるかもしれないし、あるいは生じないかもしれない、新たな分化を試みることを要求する挑戦を受諾したことを象徴する。／楽園から無情な世界に追放され、そこで女は苦しんで子を産み、男は顔に汗してパンを得なければならないようになるが、それは、蛇の挑戦を受諾したことから生じた当然の試練である。そのあとに続く、アダムとエバの性交は、社会創造の行為であって、その結果、二つの新生文明の擬人的象徴である二人の息子、羊を飼う者アベルと土地を耕す者カインが生まれる<sup>26)</sup>。

#### vi 「創造」 = 「遭遇の結果」

「挑戦と応戦（遭遇）」 「勝利を得た受難者は開拓者の役目を果たす」

最後に、幾多の曲折をへたのちに、勝利を得た受難者は開拓者の役目を果たす。この神の劇の主役を勤める人間は、神がふたたび創造活動を行なうきっかけを作ることによって神に奉仕するだけでなく、他の人々のたどるべき道を示すことによって仲間の人間にも奉仕するのである。／神話の与えるヒントを手がかりにして、われわれは挑戦と応戦の性質について、ある程度の認識を得た。われわれは、創造が遭遇の結果であり、発生が相互作用の所産であることを知った<sup>27)</sup>。

#### (3) 観光都市 「発育停止社会」

金沢の場合でも、「物語」は「完全な状態」（陰ないし静）からスタートする。金沢のように「完全な状態」の場合、いつでも「陽（動）」へ「移行（転換）」できる可能性をもっている。この「移行」をひき起こすものはなにか。「完全な状態」の変化は、「外部からくる衝動、もしくは動機」、「挑戦と応戦（二者の遭遇）」である。

「北陸新幹線開業」は、東京（ジェイコブスの「都市」——トインビーの「文明」）から金沢（ジェイコブスの「農村」——トインビーの「未開社会」）に対する「挑戦」である。「応戦」する金沢は衝き動かされる。東京と金沢の新たな形での「遭遇」に喩えることができる。この「遭遇」が、創造的「ミメシス」を喚起し、「慣習の殻」を打ち破り、金沢という「社会は変化

26) 同前，144頁，傍点——引用者。

27) 同前，146頁，傍点——引用者。

と成長の道にそって、ダイナミックに動いてゆく」のである。シュンペーターの「創造的破壊」が遂行されていくはずなのである。

また、この「移行」,「創造的破壊」がバランスをとりながら(多様性, 寛容性を兼ね備えながら)「実現」へと導かれなかったとしたら、金沢はトインビー的「発育停止社会」ともなりかねない。

完全なスパルタ人は「軍神」であり、完全なイエニチェリ兵士は「修道士」であり、完全な遊牧者は「ケンタウロス」(ギリシア神話の、上半身が人間、下半身が馬の怪物)であり、完全なエスキモーは「人魚」である。ノペリクレスが葬送演説の中で指摘している、アテナイとアテナイの敵スパルタとの対照的差異は、要するに、アテナイ人が神にかたどって造られた人間であるのにたいして、スパルタ人は戦争ロボットにほかならない、という点にあった。エスキモーと遊牧民に関しては、観察者の記述はすべて、これらの専門家の技倆が、前者においては人舟一体、後者において人馬一体の域に達していると述べている点で一致する。ノこのように、エスキモー、遊牧民、オトマンリ、およびスパルタ人は、人間性の無限の多様性をできるだけ捨てて、そのかわりに融通のきかない動物性を身につけることによって、彼らの事業をなしとげるのである。そのために彼らは、退歩の道に足を踏み入れた。生物学者の教えるところによれば、きわめて特殊な環境に、あまりにもうまく適応した動物の種は、もはやゆきづまりであって、進化の過程から置き去りにされるということであるが、発育停止文明の運命がまさにそのとおりであった<sup>28)</sup>。

前述した山出保の「私は、金沢が『観光都市』と呼ばれることをあまり好みません」、「観光は、まちの魅力の結果であってほしいというのが私の持論です」という言には、「おもてなし」や「観光立国」、「観光立県」等々、単純に政策スローガン化しがちな(ひいては「発育停止」となりかねない)風潮と一線を画す「思想」が窺える<sup>29)</sup>。

「観光」が本来「光を観る」ということであれば、山出の想い、そして思うところの「金沢」こそ、「金沢という都市(多様 寛容性)に光を観る」という意味で、「観光都市金沢」と呼べよう。「光」は、「生きる希望」であり、「生き抜く可能性」であり、「真似(学)すべき価値」である。山出の理想は、金沢を訪れる側が、いつの間にか、金沢に対して創造的「ミメシス」を遂行する、つまり創造的「模倣者」となっているところにある。

28) 同前, 180頁, 傍点——翻訳者, 傍点——引用者。

29) 注の52)を参照されたい。

## (4) 「エラン・ヴィタル」

「北陸新幹線開業」により「挑戦された金沢」はよく「応戦」し、「発育停止」に陥ることなく、「二者の遭遇」「創造」の過程へと飛躍し、「勝利を得た受難者（金沢）は開拓者の役目を果たす（都市——企業者機能を発揮する）」ことになる。そして、追従者——「ジェイコブズの農村（いわば、後背地ないし近郊）」をも発展させていくことになる。このような「都市——企業者機能」を繰り返し発揮していくところに、「光を観る都市（金沢）」が存在するのである。

真の最適の挑戦とは、挑戦された人間に、ただ一度のうまく成功する応戦をさせるだけでなく、さらに一歩さきまで進むはずみがつくように刺激する挑戦、一つの事業の達成からまた新たな努力へ、一つの問題の解決から他の問題の提起へ、陰からふたたび陽へと前進するように刺激する挑戦である。乱された均衡をもとの状態にもどす、ただ一回の有限な運動だけでは不十分であって、それでは、発生の上に成長が続くというぐあいにはゆかない。／この運動を、何度もうりかえされるリズム運動に転換するには、ベルグソンのことばを借りて言えば、「エラン・ヴィタル」（生の飛躍）がなければならない。「エラン・ヴィタル」の勢いに乗った被挑戦者は、均衡を通り越して不均衡の状態に達し、そのために新たな挑戦に遭遇する。その挑戦にこたえ、ふたたび均衡回復のために新たな応戦をするが、その応戦もゆきすぎて、またもや均衡が失われる。このようにして、可能的に無限に連続して挑戦と応戦がくりかえされる<sup>30)</sup>。

文明は、文明を挑戦から応戦をへて新たな挑戦へと駆りたてる「エラン」を通じて成長するように思われるのであるが、この成長には外面と内面の両面がある。「マクロコスモス」（外面的世界）においては、成長は、外的環境にたいする支配の漸進的増大という形で現われ、「ミクロコスモス」（内面的世界）においては、自己決定もしくは自己文節の漸進的増大という形で現われる。このどちらかの現われが、「エラン」そのものの前進を測る基

30) 前掲蠟山責任編集『世界の名著61 トインビー』、181～182頁、傍点——引用者。「シュペンゲラーは、はじめに隠喩(いんゆ)を設定し、その隠喩を出発点にしてそこから、それがまるで観察された現象にもとづく法則であるかのようにして、議論を進めてゆくのが得意であるが、あらゆる文明が一人の人間と同じ生涯の各時期をつぎつぎに経過する、と宣言する。／しかし、彼はこの主張を雄弁に述べたてているが、その雄弁はいっこう論証になっていない。さきに指摘したとおり、社会はいかなる意味においても生きた有機体ではない。(中略)文明は生物学的法則の支配を受けるような実在物でないから、われわれはそれぞれの文明がその生物学的寿命の終わりに近づくときに衰退が起こる、という説をしりぞけてさしつかえない(同上、219頁、傍点——引用者)と、トインビーがはっきり述べている点に注目したい。「社会」、「組織」に関わることを考察する場合に、忘れてはならないことである。



準になるかもしれない<sup>31)</sup>。

### 3. 金沢の「エラン・ヴィタル」

#### (1) 百姓の持ちたる国

金沢に在住した経験を持つ五木寛之は、金沢について、次のように述べている。

マスメディアに紹介される金沢のイメージは、だいたい「加賀百万石の伝統」と「何百年の歴史を持つ古い町」というものだろう。(中略)しかし、私が金沢に住みながらいつも感じていたのは、金沢は本当に風雅で伝統的な町なのだろうか、ということだった。／そういう面ももちろんあるだろうが。しかし、その表面をひと皮剥いてみると、違うものが見えてくる。そこには非常につよい生命力があふれている。質実なものがある。(中略)じつは、金沢の人たちは、そういうもともとの金沢のすがたの上に一枚、疑似イメージとでもいうものをかぶせて、世間に対して見せているのではないか<sup>32)</sup>。

金沢には「非常につよい生命力」(「エラン・ヴィタル」)があったのである。

さらに五木は、金沢の「非常につよい生命力」について、続ける。

金沢御堂は「御山(おやま)御坊」とも「尾山御坊」とも呼ばれていたという。門徒たちは、本願寺と一体のものとして「御山」と呼んでいた。(中略)この金沢御堂が天文十五年ごろに完成すると、それまで自立した集落もなかった場所に、急速に町が形成されていった。つまり、金沢という都市は、金沢御堂という寺を中心にした寺内町として発展してきたのだ。／金沢という町が誕生し、地域の拠点都市となるまでの歴史は、まさに大阪という都市の成り立ちと相似形を描いて、私の目には映ってくる。(中略)寺内町は一種の治外法権の町で、守護や荘園領主が徴税しようとしても、住民は従う必要がなかった。そして、町のなかでは自由な楽市が開かれてにぎわった。周囲には堀をめぐらせ、土塁をきずき、自衛力も備えていた。／金沢という都市が誕生したときの最初のすがたは、この寺内町だったのである。(中略)金沢の人たちは、加賀百万石の城下町・金沢ということを大変誇りにしている。市内のメインストリートを「百万石通り」と名づけ、毎年「百万石祭り」

31) 同前，183～184頁，傍点——引用者。引用文中の「自己文節」については、「未分化で混沌としていたものが、それぞれ明確な特徴をそなえた部分に分化することをいう」(同上，185頁)と翻訳者注が記されている。

32) 五木寛之『五木寛之の金沢さんぽ』講談社，2015年，150～151頁，傍点——引用者。

を開催し、なにかというと「百万石の伝統」というふうにいる。／しかし、それは前田利家が他国からこの金沢に支配者としてはいつてきてからの金沢なのである。(中略) たしかに、百万石というのは大変なものだろう。しかし、前田家が金沢にはいったのは十六世紀後半の天正十一（一五八三）年である。それ以前の金沢は、「百姓ノ持タル国」であり、金沢城ができる前には金沢御堂があった<sup>33)</sup>。

かつて金沢の中心には、加賀藩のシンボルである金沢城がそびえていた。(中略) その前田家も、明治四（一八七一）年の廃藩置県によって、およそ二百九十年間支配してきた加賀を離れ、東京へと去った。一方、金沢城は、明治維新後もしばらくは旧態をそのまま保っていたそうだ。／しかし、明治八年に城内に第七連隊司令部が設置され、明治十四年に、その第七連隊兵舎からの失火が原因で、ほぼ焼失してしまった。ちなみに、第九師団が創設されて城内に置かれたのは、その後の明治三十年代のことだ。／平成十三年、金沢城址では、金沢大学が移転した跡に、百二十年ぶりに金沢城が復元された。私が訪れたときは、ちょうどその工事が着々と進んでいるところだった。／もちろん、城が復元されることは、それはそれでいいと思う。ただし、本来の金沢のシンボルは金沢城ではなかった。そして、金沢城址のいちばん下のところまで掘れば、金沢御堂というかつてのシンボルだった寺の礎石や遺跡がでてくるはずだ。(中略) 前田家の何百年の歴史というのはたいしたものだ。金沢城も素晴らしい。そのあいだに培われたさまざまな文化も豊かである。しかし、もうひとつの歴史、打ち倒されて地中に埋められてしまった歴史というものを、きちんと頭のなかで意識することも大切だと思うのである<sup>34)</sup>。

金沢においても、「北陸新幹線開業」が、「ストロー効果」の議論を持ち出されることによって、マイナス面を強調される場合もある。「地方在来線の問題」等が絡まり、「地域社会の崩壊を促進する」といった指摘もなされる。それこそ、多様な面・意味で、首都圏からの、いわば「挑戦」を受けることになるわけであるから、ある種当然のことではある。ただ、この「挑戦」に、どう「応戦（対応）」していくのか、どう「受容」（「挑戦」をどの様に「受け容れる」ことによって「発展」）していくのか、これを問われているということを忘れてはならない。

金沢御堂が「打ち倒されて地中に埋められてしまった」としても、その上に「金沢城がそびえ」、その後「第七連隊司令部」、「第九師団」、「金沢大学」が置かれるようになり、さらにまた「金沢城が復元された」のである。金沢の「エラン・ヴィタル」は、「過去」から「現在」にかけて、寺内町 城下町 軍事都市 学園都市（そして…… 「観光都市」？）と、多

33) 同前，139～141頁，傍点——引用者。

34) 同前，147～149頁，傍点——引用者。

様な対応（「何度もくりかえされるリズム運動に転換」＝「エラン・ヴィタル」）を見せてきた。このような、金沢の「強かさ」を失ってはならないのである。

「強かさ」は「多様 寛容性」に繋がる。この「強かさ」（「多様 寛容性」）にこそ「未来」への「光（期待 可能性）」が「観」えてくる。そういうところから、「観光都市金沢」を、筆者は感じる事ができるのである。

## (2) 「内灘」想Ⅰ

五木は、金沢の後背地、「内灘」についても、「一九六九年・夏・金沢にて」（傍点——引用者）と記しながら、以下のように述べている。

内灘は、私にとって現在も最も好きな場所の一つであるだけでなく、私自身のある時期の記憶と重なり合って、いつまでも消え去ることなく残る場所のような気がしています。十六年前の内灘の姿は、もうすでにそこにはありません。ニセアカシアの森も、村も、砂丘も、すっかり変わりました。今は廃墟となったコンクリートの弾薬庫が、なかば砂に埋もれて残っている横で、夏は北陸エレキ大会やゴーゴーのコンテストが華やかに催されていますし、冬も海を見にくるマイカーでにぎわっています。／しかし、内灘の森や砂丘は変わってしまっても、内灘とか、権現森とかという言葉に対して現在も変らぬ或る痛切なイメージを抱き続けて、それぞれの人生を生きている人々は決して少なくないはずだ<sup>35)</sup>。

この五木の「内灘」に対する「想い」は、1953年6月25日、日本各地で起こった「基地とりのけ国民大会」と深く関わっている。東京の渋谷公会堂では、同25、26の両日、全国から集まった地方代表（479名）によって、「軍事基地反対全国大会」が開かれていた。内灘から参加した北陸鉄道労働組合副委員長長越野義次は、その壇上に立って、次のように報告し、「内灘に続け」が合言葉となった。

35) 五木「あとがき」、同『内灘夫人』新潮社、1969年、274頁、傍点——引用者。「あとがき」は次のように続く。「そして、そんな私自身の感慨に強い衝撃をあたえたのは、『内灘』という地名に、全く何ひとつ過去の事件のイメージを持っていない若い世代の存在でした。それは当然のことですし、またそれはそれでいいのです。そういった若い友人の一人が、こんな風に言ったのを憶えています。／『いちばん不愉快なのは、おれたちをつかまえて昔の学生時代の闘争の話を懐かしそうにする奴らだな、こっちがデモってる所へ歩道からチョコチョコやってきて、君たちの気持もわかるとか、しっかりやってくれたとか、ぼくらはやったもんだとか、中には変なのが割り込んできて一緒にインター歌い出したりするんだけど、そんな時は、出て行け！って怒鳴ってやるんだ。昔は昔、今は今だ、おまえらにわかってもらう必要はない、って。』（同上、275～276頁、傍点——引用者）、と。それは、「内灘闘争」「60年安保闘争」「70年安保闘争」そして今？

一五日の試射再開で、内灘の闘争が負けたように思われているかも知れないが、断じて負けてはいない。その証拠は次のとおりである。／第一に現在行われている試射は完全な試射になつていない。というのは権現森に座りこんでいるため、試射距離をちじめて威嚇的に射つているだけになつたからだ。／その次に、土曜、日曜日の試射をやめさせた。これも村民が押しかけて、約束がちがうとやめさせてしまったのだ。／第三に、向粟力崎の鉄板道路の座りこみは、警官隊の交替を阻み、弾丸の運搬を身体を張つて食い止めている。こうして闘いは長期態勢にきりかえられ、抵抗はますます根づよくなつてきている。村民は死ぬまでやるといつている。／ハタを振るのは共産党、デモをやるのは労働者という考え方はもう古くなつた。一〇日の日、県庁前で伊関の車にムシロ旗をふりかざして突つかかつていつたのは内灘の村民とおかみさんたちだつたではないか。独立がいいとか悪いとかいうのじゃない。もうだれに指図されているのでもない。自分たちの土地をアメリカに取られまいと漁民、農民、年寄りや婦人まで、全村こぞつて「死ぬまでやる」と立ち上つているのだ<sup>36)</sup>。

そして、この場（渋谷公会堂）に居合わせ、上の「叫び」を傍聴していたとされる安部公房が、次のような「コメント」を残しているのである。

……私にはわかった。見えるような気がした。ウチナダは日本という民族の心臓。そこからフットウする血液をみたした血管が、八方にあふれだし、浅間にたたかう人びとをつらぬき、全国の基地にたたかう人びとをつらぬき、すべての平和をもとめる人びとをつらぬき、私をつらぬき、さらにこれは全世界の労働大衆につながっているのだと……私が眠っているとき、私が食事をしているとき、私があるいているとき、私の中でその心臓は鳴りつづけている。多分私が忘れている時でさえ鳴りつづける。その心臓がとまるとき、私の心臓もとまる。私たちはその心臓から受取るものを、私たち自身が立ち上ることで返し、その心臓を守りぬかなければならないと思う。心臓なしに生きることができないように、心臓だけで生きることもできないのだ。ウチナダを孤立させてはいけない。すべての基地反対闘争を、すべての平和と独立の闘争を、がっちりと結びつけ、組織しなければいけない。……歸途、アスファルトの通りをふむ私のクツ音のなかにまで、心臓ウチナダの鼓動が鳴りひびいているようだった。私は思った。この心臓が、全國民のクツ音のなか、胸のなかで鳴りはじめなければいけないのだと。そして、そのときこそ、ウチナダの砂丘にえがかれたたたかいの跡は、コンクリートにきざんだ文字よりも、鐵板にほりこんだ文字

36) 法政大学大原社会問題研究所『日本労働年鑑 第27集』（1955年版）、1954年11月、670頁、傍点——引用者。

よりも、ながく人類を守った歴史の一ページとして残されるにちがいないのだ……<sup>37)</sup>

安部は、この「コメント」を書く2年前、すなわち日米安保条約締結の1951年に日本共産党へ入党した。それから、「1960年安保闘争」の2年後（1962年）に共産党を除名され、安部は代表作『砂の女』を出版した。この『砂の女』に記された内容と「内灘闘争」に対する安部の心の変化（「想い」）が重なっていると、筆者は考える。後年、安部は、60年安保闘争についても、70年安保闘争についても、直接触れていない。いわゆる「進歩的文化人」とは異なり、これら2つの「闘争」には参加した形跡もなければ、言論的に関わろうとした様子もないからである<sup>38)</sup>。

五木が「内灘は、私にとって現在も最も好きな場所の一つであるだけでなく、私自身のある時期の記憶と重なり合って、いつまでも消え去ることなく残る場所のような気がしています」と述べたのとは対照的である。

渋谷公会堂の「軍事基地反対全国大会」で、北鉄労組副委員長が報告していた「鉄板道路の座りこみ」等の闘争は、これを超える内灘村民の生活を疲弊させていった。そのため、1953年

37) 神田正雄・久保田保太郎『日本の縮図 内灘 軍事基地反対闘争』社会書房、1953年9月10日、289～90頁、傍点——引用者。この安部の「ウチナダコメント」は、『安部公房全集30』補遺 [1947. 9 1976. 4]新潮社、2009年、39頁にも収録されている。「作品目録」によれば、「530910 無題（『……私にはわかった。』）[エッセイ]《神田正雄・久保田保太郎『日本の縮図 内灘』》（社会書房）（初出未詳）」（同上『安部公房全集30』書誌・索引、99頁）と記されている。神田・久保田『日本の縮図』にも、この安部による「ウチナダコメント」の出所は記されていない。

38) 安部と内灘闘争、『砂の女』の関係について、詳しくは、篠崎「安部公房の『ウチナダコメント』」（『星稜論苑』第42号、2014年3月）を参照されたい。

『砂の女』は、安部が『文藝界』1960年9月号に掲載した短編「チチンデラ ヤバナ」を、長編化したものである。それは、「男は家に駆けこんで、女の髪をつかんでゆすり起した。／『おい、梯子をどこにかくした！ 梯子を出せ！』／しかし、かさぶたのように貼りついた目脂のせいで、なかなか目が開けられない。ただ、盲人のように首を左右にふるばかりで、答えることもしない。首をふるたびに、裸の體から砂がこぼれ落ちて、しみと小皺でよごれた浅黒い肉が、むきだしになつていった。／やにわに男は、女をなぐりはじめた。女は、體をまるめて、まだ無抵抗にうずくまつている。なぐると女の體から、汗が飛んだ。しかし次第に、打つ手がよわまり、やがて女の體を押しつけるだけになつている。／裸の女は、なぐる相手にふさわしいものではない」（安部公房「チチンデラ ヤバナ」、『文藝界』第14巻第9号、1960年9月、36頁）、というところで終わっている。「公房」には、「きみふさ」とルビが打たれている。

安部が1962年10月に書いた「砂の女（映画のための梗概）」というものがある（安部公房「砂の女（映画のための梗概）」、前掲『安部公房全集30』、99～126頁）。安部の「作品目録」には、「621000『砂の女（映画のための梗概）』[シノプシス]（未発表）」（同『安部公房全集30』書誌・索引、130頁）と記されている。つまり、1962年10月に書かれた未発表のもので、1964年公開の映画『砂の女』の脚本とは別物である。内容は、小説『砂の女』に即しており、ただ主人公がアメリカ人であること、米軍演習場が存在したこと等が異なっている。何を意味しているのか。小説『砂の女』で、安部が描こうとした「想い」が窺えまいか。

7月に入ると、内灘村内大根布区の接収（軍事基地）賛成派が「愛村行動隊」の名で活動し始めるようになる。8月2日に村内対立が強まり、同村大根布区民大会で独自運動の申合わせがなされ、同月8・9両日には「日共工作隊締出し騒動」が起こる。そして、16日に大根布「愛村同志会」が結成されることになる。24日になって、この「愛村同志会」が内灘村実行委員会の村民大会を実力で阻止する、という「乱闘騒ぎ」まで生じ、28日、内灘村実行委員会は総辞職することになる。大根布区から始まった「軍事基地賛成派」の動きは、ついに内灘村全体を揺がすことになったのである<sup>39)</sup>。

安部（『砂の女』）の言葉を借りれば、「土（村——引用者）の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂（村民たち——引用者）はいったん空中（中央の動き）に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられる」<sup>40)</sup>、「砂（砂地という商品——引用者）の流動（流通——引用者）に身をまかせてしまえば、もはや競争（闘争——引用者）もありえないはずである」<sup>41)</sup>。

内灘闘争における「愛村行動隊」、「愛村同志会」の登場によって、『砂の女』の舞台となった「村の描写」、「男と女の会話」、これらがいよいよ内灘と重なってくる。

「砂」は単に不毛ではなく、やりようによっては（村民自ら身をまかせてしまえば）、「金」にも化し得るということになる。

約束どおり、老人が、組合事務所の前で待っていてくれた。 / 「すみませんねえ……」 /

次のような人物、場面設定であった。「J」……男……アメリカ人……三十四歳、西部小都市の高校教員……待合室のアナウンスに、ふと夢想からさめる……マイクの声が告げているのは、『S市』行定期便の搭乗案内である。（中略）日本語が分らない」は、きき耳をたて、気づかわしげに、改札口の標識と、自分のチケットとを見くらべる」（前掲『砂の女（映画のための梗概）』、100頁、傍点——引用者）。「地図の、赤線のあたりを、指で叩きながら、『この辺に、ホテルがあるかどうかと思って……』 / 『この辺って……？』男は、地図をのぞきこみ、信じられないというふうに、まばたきを繰り返す。 / ——何を言っているんだね？ / と、隣りの男。 / ——その辺に、旅館がないかって、聞いているらしいんですがね。 / めったに行った奴もいないくらいの田舎ですぜ。（中略）『あ、そうか……』と、相手は勝手に、したり顔のあいづちをうち、『たしか、あの辺には、アメリカ軍の演習場があったわけ……』 / 「いや、三、四年前までは、あったけど……」（同上、101頁、傍点——引用者）。「『べつに意見などありません。……私は、チチンデラ・ヤバナをさがしに来たんですよ』 / 『チチンデラ……？』 / 『ヤバナ……ハンミョウ属の一種です……鞘翅目に属する、日本にしかない昆虫なんだが……ご存知ですか？』（中略）『以前、朝鮮戦争のころ、あの辺で演習したとき、たしかにまだ図鑑にのっていない、新種をみつけたように思ったんだ……あいにくと、夕暮ちかくで、見失ってしまったが、今度こそは、ものにしてやろうと思ってね……』（同上、102頁、傍点——引用者）。

39) 内灘町史編さん専門委員会編『内灘町史』、1982年、243頁参照。「内灘闘争」の事実経過については、その他、内灘闘争資料集刊行委員会編『内灘闘争資料集』（1989年）も参照した。

40) 安部公房『砂の女』新潮社、1962年、12頁。

41) 同前、13頁。



「なんの、あんたの気に入ってくれさえすりゃいいが……」 / 寄り合いでもあるらしく、事務所の奥に、四、五人の男が車座になって、笑い声をたてていた。玄関の正面に《愛郷精神》と、大きな横書きの額がかかっている<sup>42)</sup>。

「大変だね、あの連中も。」 / シャツの袖で汗をぬぐいながら、男の口調は好意的だった。青年たちが、彼が手伝っていることに対して、ひやかしめいたこと一つ言わず、きびきびと、仕事に熱中している様子に、好感がもてたのだ。 / 「はい……うちの部落じゃ、愛郷精神がゆきとどいていますからねえ……」 / 「何精神だって？」 / 「郷土を愛する精神ですよ。」 / 「そいつはいいや！」 / 男が笑うと、女も笑った。しかし、笑ったわけは、自分でもよく分らなかったらしい。 / 遠くで、オート三輪の走りだす音がした<sup>43)</sup>。

「同じことじゃないか。ここにいたって、いずれ、暮らしい暮らしはしちやいないんだろう？」 / 「でも、砂がありますから……」 / 「砂だって？」男は、齒をくいしばったまま、顎の先で輪をかいた。「砂なんかが、なんの役に立つ？ つらい目をみる以外は、一銭の足しにだってなりやしないじゃないか！」 / 「いいえ、売っているんですよ。」 / 「売る？……そんなものを、誰に売るんだ？」 / 「やはり、工事場なんかでしょうねえ……コンクリートに混ぜたりするのに……」 / 「冗談じゃない！ こんな、塩っ気の多い砂を、セメントにまぜたりしたら、それこそ大ごとだ。第一、違反になるはずだがね、工事規則なんかで……」 / 「もちろん、内緒で売っているんでしょう……運賃なんかも、半値ぐらいにして……」 / 「でたらめもいいとこだ！ あとで、ビルの土台や、ダムが、ぼろぼろになったりしたんじゃ、半値が只になったところで、間に合いやしないじゃないか！」 / ふと女が、咎めるような視線で、さえぎった。じっと、胸のあたりに目をすえたまま、それまでの受身な態度とは、うって変ったひやかさで、 / 「かまいやしないじゃないですか、そんな、他人のことなんか、どうだって！」 / 男はたじろいだ。まるで、顔がすげええられたような、変りようだ。どうやら、女をとおしてむき出しになった、部落の顔らしい<sup>44)</sup>。

「そりゃ、他人のことなんか、どうでもいいかもしれないさ……」姿勢をたてなおそうとして、やっきになり、「しかし、その、インチキ商売で、けっきょく誰かが、しこたまもっているわけなんだろう？……なにも、そんな連中の肩までもたなくても……」 / 「いいえ、砂の売り買いは、組合でしているんです。」 / 「なるほど……それにしても、結局

42) 同前、20頁、傍点——引用者。

43) 同前、34～35頁、傍点——引用者。

44) 同前、200～201頁、傍点——引用者。

はやはり、持株だとか、出資額の多寡で……」 / 「そんな、船をもっていたような旦那衆は、とっくにここを引き払ってしまいましたからねえ……私たちなんか、これで、ずいぶんよくしてもらっている方なんですよ……本当に、不公平はありませんね……嘘だと思ったら、帳簿を見せてもらえば、いっぺんで分りますから……」 / とりとめもない、混乱と不安のなかで、ついに男は立ちすくんでしまう。なんだかやたらと心細い。はつきりと敵と味方に塗り分けられていたはずの作戦地図が、あいまいな中間色で、判じ絵みたいになわけの分らないものに、ぼかされてしまった<sup>45)</sup>。

### (3) 「内灘」想Ⅱ

あの辻政信が、『文藝春秋』1953年8月の増刊号に、「内灘の砲弾の下で」という手記を寄せている。当時の内灘の様子が窺える。

去年の秋のことである。選挙がすんで疲れ切った身体で一息ついていたところへ、見なれぬ<sup>ママ</sup>律気そうな老人が訪れた。手に五万分の一の図面を持つている。汗にまみれたな<sup>ママ</sup>つかしい軍用地図の上に、赤鉛筆で区画された場所は、三十年前の思出を語る内灘演習場であつた。 / 「お願いに参りました。わしらの浜を、米軍の試射場にとられそうです。どうか助けて下さい」 / 眼に涙をたゝえての真剣な依頼が代議士一年生への最初の陳情である。 / 「私の選挙区でないので、出しやばるのも如何かと思いますが、皆さんがそれほどまでに反対なさるのなら一骨折つて見ましょう」 / と引受けたのが、内灘問題への最初の介入であつた。中山村長の疲れた表情が、村人たちのすべてを代表しているかのようである。 / 朝鮮に送る弾丸を、日本で注文し、それをこの浜で試射しようとする米軍の要求の前に、政府は地元の反対を金で解決しようとしたのであつた。 / 使者に立てられた石川県の林屋大臣が、激しい地元の反対を押切つて漸く納得させた。 / 「一月から四月末まで、の期間だけ一時的に使用する。それ以後は<sup>〇〇〇〇〇〇</sup>地元が希望しなければ絶対に強制使用はしない。 / <sup>ママ</sup>保障金として五千五百万円を内灘に支払う。肯かねば強制接收の外はない」 / 地元の人達は涙をのんで権力の前にその膝を屈した。 / 「我慢しよう。四ヶ月だけじゃ、それにしてはちと高すぎるなあ、五万円は」 / 一戸当り五万円の<sup>ママ</sup>保障金は、この貧しい村人達には思いがけぬ大金である。有難くもあるが薄気味悪いボーナスであつた。二月に入ってから、鉄釘敷の道路がつくられ、コンクリートの砲座やら、半永久的な兵舎がつぎつぎに村人達を不安に陥れた。 / 「怪しいぞ。四月末になつて返すというのに」<sup>46)</sup>

45) 同前、201～202頁、傍点——引用者。福島民報社編集部『福島と原発 誘致から大震災への五十年』（早稲田大学出版部、2013年）を読むと、これも重なってくる……………。

46) 辻政信「内灘の砲弾の下で」、『文藝春秋』第31巻第12号（夏の増刊 涼風読本）、1953年8月、45～46頁、傍点——辻、傍点——引用者。

臼井吉見も、同時期、『改造』1953年8月号に、「内灘」と題したものを書いている。

試射場そのものについては、もうけるものはいないが、ここに政府がエサにしている補償金の問題がある。一月から四月までの「一時使用」分の補償として、一戸当たり五万円と漁業補償一千四百五十万円が政府から支払われている。更に、継続使用の補償として政府の示しているのは、砂丘地灌漑と防風林造成に二億五千万円、船だまり施設に六千万円という。試射場にくりこまれたのは、十二町歩の民有地と、縦九千ヤード、横八百ヤードの海面だ。この海面にしても、さして漁が多いわけでもなく、特に近ごろはこの近海の漁はめづきり減ってきているという。だから村の船の大部分は北海道や山口県あたりまで出かけるが、近来は土地土地の漁業組合の力が強くなって、各地で閉め出しを食っているという。だから、この漁師の多くは出稼ぎらしい。「漁場をもたぬ漁師ほどみじめなものはない。十月の祭にはみんな帰ってくるが、祭がすめば、また遠くへ出稼ぎだ。一年中うちを留守にしても、ろくにもうけがない。この村の前途を考えると暗澹たるものだ。いまのうちに、内灘の船はどこへ出漁してもいいというようなことにでもしてもらわん限り心細いものだ。」とは、漁業組合長のもらした言葉だった。これによつても明かなように、試射場問題を別としても内灘の漁業の将来には何の希望ももてない。とりわけ、船の持主や網元には苦慮のタネであろう。試射場問題にむすびつけて、局面打開を考えているらしいことは、これらの口吻によつても、それとなく感じられたものであつた。また土地をもっているものからすればもともと砂のなかにできたような村で、麦やサツマイモにしても、どれほどの収穫でもない。砂丘地灌漑と防風林造成のための二億五千万という、政府がチラつかせている補償金が、土地の持主にとつて魅力でないはずはない。試射場設置に進んで賛成するものはないにしても、閣議決定の今となつては、承認すべきではないかという空気が少くとも村会議員の間には、動いて来ているのではないか。それがわかっているからこそ十四日の暴力による村議会流会になつたのではなからうか<sup>47)</sup>。

そして、臼井はこう結ぶ。

内灘に再び砲聲がとどろき、村の有力者間に目に見えぬ妥協のけはいの動きは始めているとき、この問題の解決を安保条約破棄にまで結びつけて推し進めようとする労組、学生らの応援隊と、村本位のエゴイズムをぬけられぬ反対派村民とが、今後の持久戦で、どこまで歩調を揃えることができるかが、この問題を決するカギであろう<sup>48)</sup>。

47) 臼井吉見「内灘」、『改造』第34巻第10号、1953年8月、122頁、傍点——引用者。

『砂の女』の「男と女の関係」のようである。

## おわりに

1957年に入って、西野寿二が書いた「内灘 接收解除にはなつたものの」(『日本週報』第400号)を次にみる。非常に興味深いことが書かれている。

今年(一九五七年——引用者)一月三十一日付で内灘を返還するといわれたとき、人々は今更らのように愕然とした。見栄も外聞もなかつた継続使用を望む声が、明暗二つの色で浜を彩つたのである。/直接的補償として、これまで村民に支払われたもの、五千五百万円の見舞金(一戸当り平均五万円)、それに総計一億六千万円の漁業補償、また試射場要員には村民九十一名が優先採用され、この平均ベース税込一万六千円、この人たちは最後まで全駐労には加盟しなかつた。その他千五百万円の国庫融資による四十七戸の村営住宅、反対闘争カンパ資金をもとに建設された黒津船部落の診療所(医療施設費を含めて七十万円)村費四十万円で出来た内灘第二診療所、見ようではあれもこれも濡れ手で粟であつた。夢であつた。夢を追うひとびとは、米軍の継続使用が駄目なら、せめて自衛隊に使つて貰いたいといっているが、浜はこれから独自でやつて行くのだという声もあり、ここでも対立している。が、内灘は一度狼が来たといつて人々を集めた子供と同じであつた。この上叫んだとて、もう何人の手も借りることは出来ないだろう。ここには一向一揆、加賀門徒の血が流れている筈であつた。それが……<sup>48)</sup>。

しかし、西野は次のようにも述べている。ここが重要な点なのである。

二十七年末でラジオ普及率四四パーセント、新聞五六パーセントだったものが、三十年末でラジオ七一・八パーセント、新聞八パーセントという数字は、豊かさというよりは貧しさと解される数ではないだろうか。今までがあまり惨めだつたのだ。それが補償だ何だ、いくらか世間並みに近くなつたといふだけのことなのだ。貧乏人が米を喰つたからといつて、決して豊かになつたのではないのと同じだ。ラジオもきかず新聞もとらず、その

48) 同前。辻「内灘の砲弾の下で」、臼井「内灘」と同時期のものとして、次のものも参照した。山崎明美「内灘はアメリカの領土か」、『平和』第15号(青木書店)、1953年7月。谷内成雄「内灘射場に上る反米の叫び」、『日本週報』第249号、1953年6月15日。

49) 西野寿二「内灘 接收解除にはなつたものの」、『日本週報』第400号、1957年3月15日、17頁、傍点——引用者。

ままでいたら、村は豊かになれたというのだろうか<sup>50)</sup>。

そして、内田康夫の『砂冥宮』（2009年、浅見光彦シリーズ）に至ると、内灘の描写は、さらに、以下のような飛躍（「生の飛躍」＝エラン・ヴィタル）を遂げるのである。

着弾地観測所を見て、その近くの神社跡地を訪れた。この辺りに掘っ建て小屋など、内灘闘争の拠点があったのだという。峰子は車を降りて、砂地の中に足を踏み入れた。／佇（たたず）んで、足元の砂地を見下ろしている。／あの頃、汗と涙と、時には流した血まで吸い込んだであろう砂の奥深くに、彼女たちの青春の冥宮（めいきゅう）があるのかもしれない。／「すっかり変わってしまったのねえ……」／峰子は周囲を見回して、嘆息を漏らした。かつては砂また砂の大砂丘だった内灘の台地が、いまや巨大病院や町役場や文化ホールなどの公共施設、それに商店や新興住宅などで埋めつくされている。目の前には、河北潟と日本海を繋ぐ放水路にかかる美しい橋がそびえ立っている。（中略）内灘を去る前に、もう一度、鉄板道路を走った。坂の上から眺める日本海は、半世紀以上の遠い日と変わらぬ波を寄せている<sup>51)</sup>。

「金沢」（シュンペーター的「企業者」機能を備えたジェイコブズの「都市」とその後背地「内灘」（ジェイコブズの「農村」）は、「初めに都市ありき——そして農村が発展する」ように、多様な対応（トインビーが指摘した「何度もくりかえされるリズム運動に転換」＝「エラン・ヴィタル」）を見せてきた。この「非常につよい生命力」（五木）は、過去に裏打ちされながら（「想い」）、未来にも（「鉄板道路」のように）繋がっていく、そのように、期待できるもの（「思い」）である。

このような「想い」、「思い」が、「北陸新幹線開業」をめぐって、現在、「金沢の地（血）」から「浮かび来し『思想』」なのである<sup>52)</sup>。

50) 同前、19頁、傍点——引用者。

51) 内田康夫『砂冥宮』実業之日本社、2009年、303頁、傍点——引用者。

52) 「思想」とは、過去を「想」い、未来を「思」うことを、現在において連続的に（時々刻々）為すことを意味する。故に、一瞬たりとも静止するものではない。筆者が使用する「思想」について、詳しくは、前掲篠崎『東畑精一の経済思想 協同組合、企業者、そして地域』を参照されたし。